

『三四郎』ヘーゲルの弁証法

Junko Higasa 2014.4.19

ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770.8.27～1831.11.14)はドイツの哲学者であり、その「弁証法」がよく知られている。

三四郎が借りた本の書き込みに『舌の講義にあらず、心の講義なり』と書かれているように、命題テーゼ(These)と反命題アンティテーゼ(Antithese)から統合ズンテーゼ(Synthese)へ向かって、自己の矛盾を客観的に修正しながら真理を追究していく方法論である。それを聴くのは反乱分子になるためでも、権力社会で衣食住のために「のっぺらぼう」に徹して働くためでもない。『向上求道の念に切なるがため』であって、純粹に自己の運命を改造して未来を決定するためである。それは「社会における個人の人生を作り上げていく」上の哲学であると同時に、三四郎が恋愛体験を通して女性を解読し、結婚相手を決定する上での哲学でもある。

ヘーゲルを語るより前の頁に、三四郎が矛盾を感じる場面がある。「大学の空気とあの女」「あの色彩とあの眼付」「あの女を見て、汽車の女を思い出したこと」「未来に対する自分の方針が二途」「非常に嬉しいものに対して恐れを抱くこと」理性と感情、無垢と彩色、教育と無教育、東京と田舎、度胸と臆病という命題と反命題から、三四郎は女性に対する自己の感情を修正しながら結婚を考える。本作時点では「田舎と御光さん」という正統合が有効である。